

## アウラの崩壊と人間存在の変容

——ニーチェとベンヤミン——

前川 一 貴

今回の発表で私は、『歴史の概念について』IXにおける、「メシアはたしかに解放者として来るのだが、それだけではない。彼は反キリストの超克者としてやって来るのだ。もし敵が勝利を収めるなら、その敵に対して死者たちさえもが安全ではないだろう」という一節を切り口にして、ベンヤミンはなぜニーチェの『反キリスト』を超克しなければならぬと考えたのか、について話した。

まず私は、ベンヤミンが死者を物と同一視しており、そもそも彼が生涯、物とじかに触れ合っている関係を希求していたことから、彼は何とかして死者との直接的なつながりを取り戻そうとしていることについて述べた。『歴史の概念について』のVI, XI, XIIを見てみると、社会民主党の進歩主義的なコンフォーミズムによって支配・搾取されているのは、死者だけでなく自然もであって、ベンヤミンが『言語一般および人間の言語について』そして『模倣の能力について』で自然との関係を求めたあり方を振り返ると、死者の想起と自然の想起が重なる箇所が見られた。ベンヤミンの初期言語論は、人間と物がじかに接している感覚が夢想され、それなのに人間の言語が物自体から離れてイメージや意味を操作している事態を嘆いているのに対し、後期言語論は、人間にも備わる自然の模倣の能力に注目し、言語の文字を「非感性的類似」と捉え、そのさまざまな無数の組み合わせ（コラージュ）の思想によって、自然との類似が電光石火のように突然閃くとした。それは『歴史哲学テーゼ』における死者の想起ときわめて似ているものだ。ベンヤミンはそうにして、もはやじかに触れることはできない死者と何とかしてつながろうと、過去をつなぎ合わせて、さまざまな形で類似したイメージを引き起こそうとしたと言える。

それに対してニーチェの『反キリスト』は、あらゆる関係性をすっかり放棄して、自己の内に引き籠もってしまうのであって、そうした態度は死者を見捨てることになる、ベンヤミンは考えていたようである。しかしたとえ物とでも、関係の生じるところにはシステムが形成され、その自己生成機能は、管理・排除という動作を含まないことはない。ニーチェの「貴族」・「強者」・「孤独」・「支配」・「権力への意志」といった語句は、システムの根拠の無根拠という暴力に対抗して、すべてを受け入れるところの究極的な愛を説いたのではないかと私は最後に問うた。